

家庭教師  
~Hの偏差値あげちゃいます~  
のおねえさん

***My private teachers***

**Original Story** アトリエかぐや  
[Berkshire Yorkshire]

**Novelization** 岡田留奈

**Original Illustration** Chocochip

## プロローグ

5

## 第1章

25

## 第2章

67

## 第3章

105

## 第4章

137

## 第5章

175

## エピローグ

203



## プロローグ

もしかして君、痴漢さんですか？　そう尋ねられたとき、ひとはどう答えればいいのだろう。オッサンの激しいポマード臭漂う中、俺は薄ぼんやりと考えていた。

痴漢ですか？　と聞かれて素直にうなづくヤツなんているのかな。だいたいは否定したり、うろたえたりするんじゃないのか。もしくは逆ギレ？　うーん、これがいちばん多そう。

「あう、やっぱりそうなんだ……」

「へ？」

サラサラのストレートヘアに、パキっとしたグレーのリクルートスーツ。色素の薄い理知的な瞳に見つめられ、俺はハッと我に返った。

キミ、チカンサンデスカ？

「……ノ、ノウ!!　俺、痴漢じゃないから!」

痴漢という単語に、周囲の乗客たちが一斉に反応する。違う違う違う!　違いますって!　みんな誤解しないでくれ、俺は絶対痴漢なんかじゃない!

などと心の中で叫んでみても後の祭り。確かに俺は、痴漢と間違われても仕方ない行いをした。……電車が揺れたと同時にバランスを崩し、というっかり掴つかんでしまったのだ。

いま目のまえにいる、見知らぬお姉さんの胸を。この手のひらで、がっちりと。

でもこれって、当然のように不可抗力だ。俺が悪いんじゃない、揺れた電車が悪いのだ。「だ、ダメだよこういうのは。き、君、まだ若いんだし、いま犯罪に走ったら将来だいなしになっちゃうし……」

俺の否定の言葉は耳に入らなかつたらしく、彼女は立て続けに言葉を繋いだ。

「それに、君かっこいいんだから痴漢なんてしなくても……って、そ、そうじゃなくて。なに言ってるんだろ私。やだ……」

お姉さんは、なぜか顔を赤らめながら上目遣いに俺を見た。長いまつげに縁取られた大粒の瞳に、ドキリとさせられてしまう。

よく見ると、けっこうかわいい……いや、よく見なくても、すごくかわいいかも。

年は俺よりちょっと上ぐらいか。むきたてのタマゴみたいになるつつるの肌。いわゆる小顔ってヤツ？ スーツの上からでもわかる、キュツと締まった細いウエスト。胸も丸みがあつて、ほどよい大きさ。露出の少ない格好なのに、そこはかとなく漂うこの色気はなんだ。

いやいやいや。冷静に鑑定してる場合じゃないぞ、俺。

「あの、俺は痴漢なんかじゃありません！ これは偶然というか、つまり事故ってヤツなんですよ」



「事故？」

彼女がそう顔を上げた瞬間——ぐらりと再び電車が揺れた。続けて急ブレーキの音。

「うわっ！」

俺は電車の進行方向側につんのめった。そしてリクルートスーツの彼女は奇しくもそちら側に位置していて、必然的に……。

「きゃ、きゃああっ!？」

むぎゅっ。

運の悪いときというのは重なるもので、図らずも彼女に抱きつく格好となってしまった。

「わ、わわ、す、すんません！」

「ああああ……いきなり抱き締めてくるなんて大胆すぎ。もしかして居直ったのかなあ……」

「ち、違いますって！ 偶然のハプニングです！ 不可抗力！」

弁解しながら身体を離す。そうはいってもこの状況である。はずみとはいえ、彼女に抱きついてしまったのは本当だ。誤解されるのも仕方ないといえば仕方ない。

「……そうね、私がなんとかしてこの子を更正してあげないと。よし、がんばれ理央！」

お姉さんはなにやらぶつぶつとつぶやき、小さくガッツポーズをしてから俺の腕を掴んだ。

「君、ちよつと来て！」

「え？ あ、あの、ちよつと！」

電車がホームに滑り込み、慌ただしくドアが開いた。俺は人込みに流されるように、電車の外へと押し出される。

……とつさに嫌な想像。客観的に見ると、俺って犯罪者？ もしや痴漢容疑をかけられたまま駅員に突き出されるのか？ でもって警察に連行されたりして、家族を呼ばれて学校にバレて、終いには週刊誌で実名報道されたりして……うわあああ、見事なまでの転落人生！

「……あのね君。さっきも言ったけど、まだ若いのに痴漢に走るなんて間違ってるわ。お姉さん、そういうの健全じゃないと思うの」

ジリジリと照りつける太陽の下。

俺はなぜか、駅のホームのはしっこでお姉さんに説教されていた。

てつきり駅員に突き出されるかと思っただが……これはこれで拍子抜けな展開である。

「確かに君ぐらいの年頃だったら、女性に対して興味を持つのはあたりまえのことだと思う。でもね、捌け口を求めるにしてもこういうやり方を選ぶのはよくないよ？」

「だから、そうじゃなくてすね」

「いいの、わかってる。とってもデリケートな問題だし、言いにくいことだもんね。うん、



隠したくなる気持ちもわかるよ」

……あーだからもう！ 隠したいんじゃないくて、誤解を解きたいんだよね！

即座に連行されなかったのはありがたかったが、お姉さんの中では俺イコール痴漢という図式が完璧に成り立ってしまっているようだった。自分の名誉のためにも冤罪であることを証明したい。しかし、あいにく今日は気温三十度超えの真夏日である。このままホームで干物のように干からびるまえに、なんとかこの場をやり過ごしたい。もういつそのこと、罪を甘受して「そうです、ボク痴漢行為をしたんです」と証言してしまいたい……。

「こら。お姉さんの話、ちゃんと聞いてる？」

彼女は眉間に皺を寄せ、ぐぐつと俺の顔を覗き込んだ。

「聞いてますよ」

ぐぐつ。

負けじと俺も、お姉さんの顔を見つめ返す。

「そ、それならいいけど。と、とにかく、もう二度とこんなことしちゃダメ。まだ若いんだし、ほかにいくらでも発散する方法はあるでしょ？ 例えばスポーツとか……。あ！ そうそう、サッカーなんていいんじゃないかな」

「サッカー……ですか？」

「うん。このまえテレビで試合観たけど、けっこうおもしろそうだったの。あ、それかバ

スケでもいいかも。……うーん、悩むなあ。どっちがいいんだろ」

お姉さんは腕を組み、むむうと唸うなっている。

「あいにく俺はスポーツしないんで、サッカーもバスケも無理っぽいんですけど……」

「そうなの？」

「はあ」

「ええ。君、けっこうサッカーのユニフォームとか似合いそうなのに……」

「あ、どうも……」

「……………」

しばし、無言で見つめ合うふたり。

……あれ？ 俺たち、さっきまでなんの話してたんだっけ？ つーかなんでスポーツ談義に花を咲かせてるんだ？

などと根本的な問題にぶちあたっているそのとき、背後で口笛の音が聞こえた。

「ひゅーひゅー、こんな公衆の面前で愛の告白？ やるじゃない。最近の若者って大胆」

「……はあ？」

振り返るよりも先に、その人物……ショート丈のキャミソールにはつつんぱつつんのホットパンツ姿という夏真っ盛りを体現した女性が、俺の目のまえに回り込んだ。

「アナタ、かわいい顔してけっこう強引だよ。いきなりその学生クン取っ捕まえてさ、電車から降ろしちゃうんだもん。見てたよ見てたよ？　で、告白はもう終わったの？」

「え？　い、いえ、あの……」

謎の女性にまくし立てられ、お姉さんは戸惑っている様子だった。

しっかしこのひと、すげえ巨乳だ……。

俺は戸惑うどころか、すっかり彼女の胸元に釘付けになっていた。白いキャミソールからこぼれ落ちそうなほどむっちりとしたバスト。それは丹念に育てられた高級なフルーツのようにみずみずしく、たわわに実っていた。

そんな豊かな乳房をお持ちでいらっしゃるにもかかわらず、ウエストはきゅつと細い。腕や足首も締まっている。適度な筋肉と女らしいふつくらとした部分のバランスが絶妙だ。活動的なショートカットが、彼女の健康美をさらに際立たせている。

「あはは、照れなくてもいいって！　じゃあ、私はちよつと離れたところで見守ってあげるから、おふたりはそのまま続けて続けて♪」

「ちよ、ちよつと待ってください！　そういうんじゃないんですっ」

馴れ馴れしく話しかけてくる巨乳美女に、お姉さんが大きく否定した。

「こ、この男の子が痴漢してきたんで、それで私が注意しようとしてただけで……」

「え？　痴漢？」

驚いたような表情で、巨乳美女が俺を見やる。

「なんだ、告白じゃなかったんだー。それにしても、この子が痴漢ねえ。ふうーん」

「ち、違います！ これは誤解なんです！ 俺は断じて痴漢なんか……」

「いやー、こんなにイケてる痴漢なんて初めて見たわ。記念に写真撮つとこ」

巨乳美女はさっと携帯電話を取り出し、その小さなレンズでパシャパシャと俺の写真を撮り始めた。

「ちょ、ちょっとやめてください！ なにするんですかつ」

「いいねいいねー、こんなにかっこいい子が痴漢なら、お姉さん身体許しちゃうかも……むしろ逆に襲っちゃったりして♪」

「はああ!？」

「あ、アナタ、なに言ってるの！ そんなの絶対ダメですよお！」

「あらあー？ なんでそこでお姉さんが反応するワケエ？ もしかして、ホントはキミたち恋人同士で『有り余る若さのあまり、つい痴漢しちゃいました』っていうイメージプレイの最中だったりして？」

「なんでそうなるんですか！」

俺は頭を掻きむしりながら叫んだ。話がどんどん妙な方向へと進んでいく。

……あああ、いったいどうしたらいいんだ！